

氏 名	イシ カワ カズル 石 川 薫
学 位 の 種 類	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 音 第 205 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 26 日
学位論文等題目	〈論文〉ロマン派におけるアゴーギクの表現 ー演奏音価情報楽譜の提示ー
総 合 審 査 委 員	
(主査)	東京芸術大学 准教授 (音楽学部) 照 屋 正 樹
(副査)	〃 〃 (〃) ローラン・テシュネ
	〃 教 授 (〃) 小鍛冶 邦 隆
	〃 〃 (〃) 野 平 一 郎

(論文内容の要旨)

アゴーギクは音楽的な表現をするために必要な要素である。これまでアゴーギクは感覚に頼るところが多く、演奏者の音楽性に委ねられるものであった。口頭伝承にも似た形で教師から生徒へとアゴーギクの表現方法が伝授されてきたが、音楽学習者自らがアゴーギクを学習することはできないかと考え、その手段としてアゴーギクを視覚化することを試みた。そのために、音楽表現の表出力を高めるための一助となるものとして、アゴーギクを視覚化した「演奏音価情報楽譜」を作成した。

「アゴーギク」は、広義に、曲中において“tempo rubato”や“ritardando”、“accelerando”などのように楽譜に記載されているものと、記載されていない全てのテンポの変化を指す。アゴーギクを初めて提唱したフーゴ・リーマン Hugo Riemann (1849-1919) は、「楽譜に記載されなかった小さなテンポの変化である」とアゴーギクを定義しているが、本論文においては、リーマンが定義した「楽譜に記載されなかった小さなテンポの変化」という言葉をそのまま用いるのではなく、「楽譜に記載されていないアゴーギク」と表記した。記載されているアゴーギクに加えて、記載されていないアゴーギクを音楽的な演奏に反映することのできる演奏者となるためには、アゴーギクの学習も必須と考えた。

そこで、指定されたテンポにおける基礎的なリズムの習得後、アゴーギクを用いた音楽的な表現をするために、ソルフェージュの研究領域からどのようなアプローチができるのかを考察した。読譜能力を高め、「高度な読譜力」を培うことでアゴーギクを感じ取る能力をより高めることになり、さらには専攻実技の演奏能力と相互に結びつくことにより、音楽表現の表出力が一層高まるとされる。「アゴーギク」を視覚的に捉えることで、音楽学習者の「アゴーギク」に対する意識がどのように変化するか、ソルフェージュの研究領域の視点から研究を試み、「楽譜に記載されていないアゴーギク」を視覚的に捉える方法として「演奏音価情報楽譜」を作成した。この楽譜を作成するにあたり、アゴーギクの要素を多分に含むショパンのマズルカを取り上げ、大家と呼ばれる演奏家 6 名の演奏分析を実施した。CD の演奏を緻密にデータ分析し、実際のマズルカの演奏における微細なテンポ変化を抽出し、それを「演奏音価情報楽譜」に起こした。これは、データを数値化したものに留まらず、既存の出版楽譜に近い形で表記した楽譜である。この「演奏音価情報楽譜」を用いて、その使用法と学習法を提示し、アゴーギクを視覚的に捉えることの有用性を述べた。

また、アンケートを実施したことにより、「演奏音価情報イメージ楽譜」が資料として役に立つことがわかり、アゴーギクを視覚化した楽譜が音楽学習者の興味を引いたことも感じられた。しかし、視覚的に捕われすぎないように、音楽学習者にとって普段見慣れている「見やすい楽譜」を基にアゴーギクの

情報を付加した形にすることが必要であると考えた。また、初段階での練習に演奏音価情報楽譜を用いるのではなく、音楽学習者の読譜能力に応じて適切に用いることが重要である。

アゴーギクを視覚化した「演奏音価情報楽譜」を演奏のための参考資料として用いることにより、アゴーギクに対する意識変化を促すことができると考える。音楽を構築する上でフレーズを理解することは重要であり、フレーズを表現するためにアゴーギクは必要な要素の一つである。音楽学習者は、様々な要素を相互に連係させることにより高度な音楽表現が可能となるが、音楽表現の表出力を総合的に高めるためにも、アゴーギクを理解することが必要であり、それを音楽学習者自らが学ぶことができる「演奏音価情報楽譜」は有用である。演奏音価情報楽譜の最大の効果は、「記載されていないアゴーギク」を視覚的に捉えられることで、アゴーギクの表出能力を高める契機を作り、実際の演奏にそれを反映できるようになる、と考えるのである。

今回の研究では、楽譜作成ソフトの「フィナーレ」を用いて演奏音価情報楽譜を作成したが、今後はコンピューターソフトの開発者や開発団体との連係を持って、共同研究することも視野に入れていきたい。また本論では、「記載されていないテンポ変化であるアゴーギク」について論述したが、今後は「記載されているアゴーギク」である“accel.”や“rit.”、“tempo rubato”も取り上げ、それらを反映させた演奏音価情報楽譜を作成していくことも可能である。効果的な“accel.”や“rit.”、表現力豊かな“tempo rubato”のテンポ変化を演奏音価情報楽譜に加えて表すことは、多くの音楽学習者にとって演奏に役立つ参考資料となるであろう。

(総合審査結果の要旨)

本論文はアゴーギクを視覚化し、音楽学習者の便を図れないかという観点から「演奏音価情報楽譜(申請者命名)」を作成し、その有用性を述べようとしたものである。

「演奏音価情報楽譜」作成に際しては、独特のアゴーギクを含むショパンのマズルカが取り上げられている。演奏家6人のCDをデータ化し、現在のコンピュータ技術(フォトショップ、イラストレーター、フィナーレなど)を駆使することにより、既存の楽譜では表示されない情報の表記を試みた。さらに、その楽譜から読み取れる演奏分析を行い、それぞれの演奏表現の相違を明らかにした。表現不可能な情報を作曲家独自の方法で記載することは20世紀に入り図形楽譜等多く試みられてきたが、既存の楽譜の変容により作成されたこの新しい記譜法から、どのような教案が作成できるかについても試案が述べられており、総じてユニークな論文と評価出来る。

しかし審査会では問題点の指摘もあった。1. アゴーギクの定義が曖昧なまま、時間の計量化のみを問題にした。2. 本来マズルカ等のアゴーギクは伝承されてきたものであり、計量化し視覚化した際、逆に聴覚や身体感覚がおろそかにならないかという危惧。3. リズム訓練との関連性が希薄である点。主なものは以上である。

なお、私の所見にも記した通り、将来コンピュータ技術がより進化し「演奏音価情報楽譜」が容易に作成可能な環境の上でこの論題に取り組めば、本論文は異なった方向にシフトしたと思われる。これらの楽譜を多数作成した申請者の努力が惜しまれてならない。

以上、様々な問題を含んでいるが、現在のソルフェージュ教本に存在しない「楽譜に書かれていない情報を視覚化し、表現する」という点に着目し、難題に果敢に挑戦した研究の出発点としての意義が認められると判断し、合格とした。